

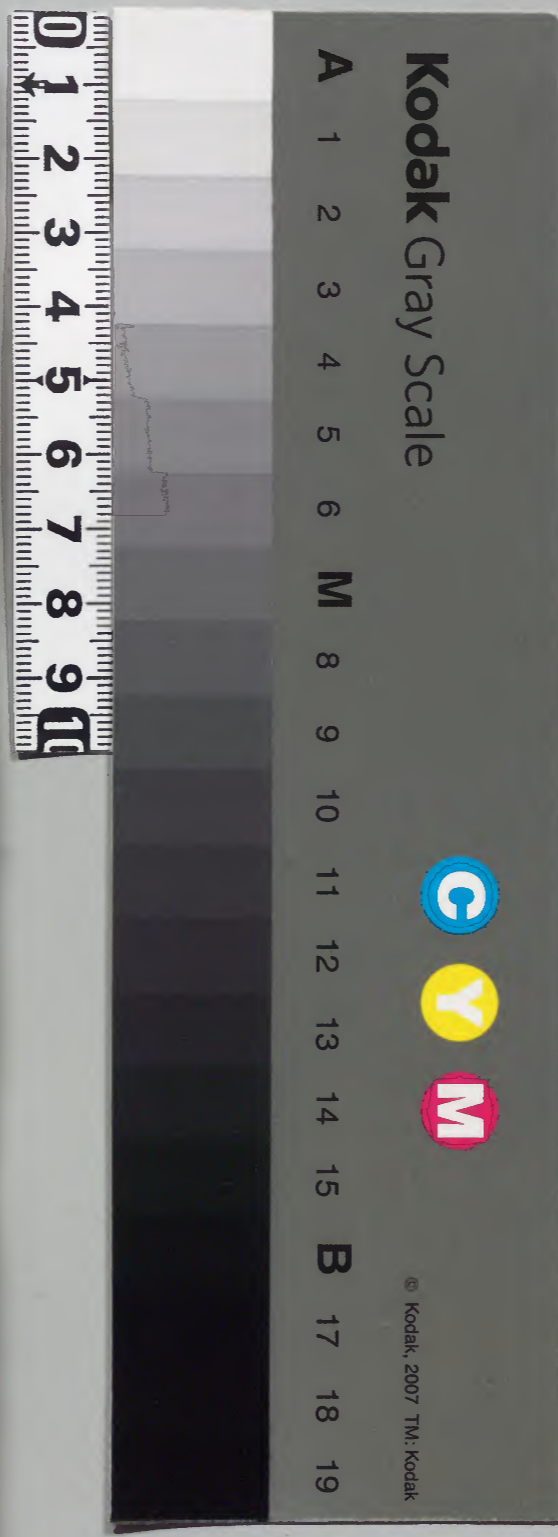
和書  
 分類  
 架  
 冊  
 號  
 函  
 號

和書門  
 二七九  
 二一八  
 二七六  
 冊架函號類

庫	文	閣	內
九	二		和
九	七		書
八	九		
冊	三		
架	一		
	二		
	七		
	六		
	冊		
	架		
	函		
	號		
	類		

內閣文庫	
番號	和 27916
冊數	30 ( 1 )
函號	199 189

199-189



道

高砂

明治十二年庚辰

長年  
今成始乃 旅 志 有 幸  
目 色 中

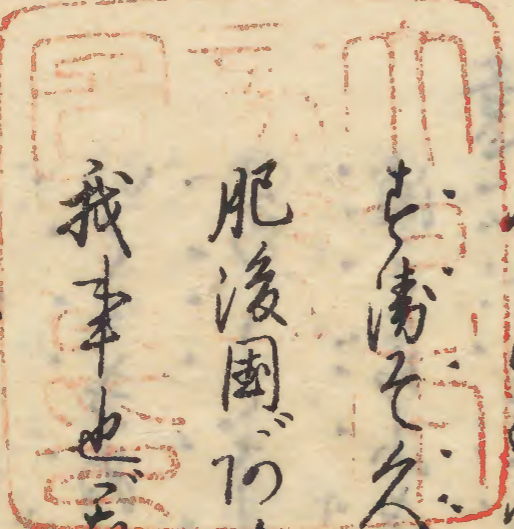
と 清 そ 久 し き 抑 是 け 九 別

肥 後 國 の 藩 の 文 武 神 道 友 戚 と 八

我 事 也 家 い ま 一 如 と 目 人 事 小 福 ぶ け 甚 矣

思 ひ 立 ち ぬ へ 上 下 と い ぐ 又 上 下 死 活 と ち ち ち ち

播 磨 高 砂 の 浦 々 も 一 見 せ し や と 存 心



旅衣末巻くの如路をくぐふは  
 舟浦の浪の如くもたれまはる  
 いくきぬらんゆとまへをいさむをれも  
 ぶくとさうも思ひし横塵切さる砂の  
 浦よあふちりさる砂れうも小恙にかり  
 入る砂の松乃春風吹くまで尾上中ん陸を  
 望む色なりり波かきみの磯うまき

春  
 春丁を遠の満丁なまき 誰よりも知人  
 小せんる砂乃松もむくの友れうく  
 色うをくはあき言れ横くて老乃鶴  
 の孫くく小残ふ有明の春乃春ね春  
 起春も松風をのまき別くう後  
 友とまら遊の押ひとのふる針ねり  
 春信をまらよまら浦風の落葉衣乃

高少

神ニ宿ル木ノ後ノ蔭ヲからふよ末ノ若キ  
蔭ノとシふよ所ニ多ク砂ヲ悉ク屠ル  
上ノ表ニ年ヲ少シて老乃浪を由り申  
く乃木ノ下陰乃落葉カ成マステ  
いノち形ノ入ル様はまくいきノ松ノ  
そノ形ヲ望ミた例ノ如くいふハ  
是ナらむ人ノよシめルき事一ノのハ

木ノ形ノ事ヲてん乃何更ニほくいそ  
いノち形ノ入ル様はまくいきノ松ノ  
の木枝中に在る人の心はも研ル松ノ  
乃分此松枝中形ノ如クていふハ  
乃砂包ノに乃松ノ相生ノ為何リ  
乃苗而乃江ノ水と隔キるハ乃たまま  
乃やてお生ノ松ノは乃いふ人ノ

古今兼の序小高砂位の之れ松もね  
生のやう小覚ともふ尉い乃位者老  
色れ祖母もも田取の人なき者年  
あつハヤシ<sup>とん</sup>入<sup>し</sup> 姉<sup>とん</sup>きややみ色は  
老人の夫婦一<sup>とん</sup>下<sup>し</sup>有<sup>し</sup>形<sup>し</sup>とと成<sup>す</sup>よ  
まみのえも砂乃浦<sup>とん</sup>山<sup>とん</sup>岡<sup>とん</sup>成<sup>す</sup>隔<sup>す</sup>位<sup>とん</sup>せ  
りふとい<sup>とん</sup>り<sup>とん</sup>あ<sup>とん</sup>や<sup>とん</sup>ん<sup>とん</sup> <sup>とん</sup>し<sup>とん</sup>そ<sup>とん</sup>の

汗<sup>とん</sup>作<sup>とん</sup>や<sup>とん</sup>山<sup>とん</sup>川<sup>とん</sup>万<sup>とん</sup>里<sup>とん</sup>と<sup>とん</sup>海<sup>とん</sup>く<sup>とん</sup>い<sup>とん</sup>き<sup>とん</sup>と<sup>とん</sup>も<sup>とん</sup>ま<sup>とん</sup>ふ  
か<sup>とん</sup>ふ<sup>とん</sup>う<sup>とん</sup>海<sup>とん</sup>け<sup>とん</sup>ひ<sup>とん</sup>の<sup>とん</sup>妹<sup>とん</sup>當<sup>とん</sup>れ<sup>とん</sup>及<sup>とん</sup>ハ<sup>とん</sup>遠<sup>とん</sup>く<sup>とん</sup>し  
と<sup>とん</sup>先<sup>とん</sup>業<sup>とん</sup>して<sup>とん</sup>色<sup>とん</sup>沙<sup>とん</sup>流<sup>とん</sup>ん<sup>とん</sup>せ<sup>とん</sup>よ <sup>とん</sup>ふ<sup>とん</sup>砂<sup>とん</sup>位<sup>とん</sup>  
の<sup>とん</sup>に<sup>とん</sup>乃<sup>とん</sup>松<sup>とん</sup>と<sup>とん</sup>此<sup>とん</sup>情<sup>とん</sup>の<sup>とん</sup>之<sup>とん</sup>れ<sup>とん</sup>を<sup>とん</sup>ふ<sup>とん</sup>も<sup>とん</sup>相<sup>とん</sup>生<sup>とん</sup>の<sup>とん</sup>  
名<sup>とん</sup>ハ<sup>とん</sup>あ<sup>とん</sup>り<sup>とん</sup>そ<sup>とん</sup>う<sup>とん</sup>一<sup>とん</sup>浦<sup>とん</sup>して<sup>とん</sup>や<sup>とん</sup>生<sup>とん</sup>り<sup>とん</sup>の<sup>とん</sup>人<sup>とん</sup>  
也<sup>とん</sup>して<sup>とん</sup>年<sup>とん</sup>久<sup>とん</sup>し<sup>とん</sup>色<sup>とん</sup>も<sup>とん</sup>信<sup>とん</sup>者<sup>とん</sup>ら<sup>とん</sup>と<sup>とん</sup>か<sup>とん</sup>う<sup>とん</sup>ひ  
剛<sup>とん</sup>を<sup>とん</sup>る<sup>とん</sup>尉<sup>とん</sup>と<sup>とん</sup>祖<sup>とん</sup>母<sup>とん</sup>と<sup>とん</sup>松<sup>とん</sup>訪<sup>とん</sup>友<sup>とん</sup>ふ<sup>とん</sup>ひ<sup>とん</sup>年<sup>とん</sup>

高砂

浦くおせの支婦と成るれと 傷  
と安らかりし海や梅くさるるは実(い)が  
おせの松乃物語而も史並福はなれつ  
むし乃人の中へ是ハ同名度代の  
そとく外りしち初せりふと代乃  
万葉集のいふへの儀 伝者とP  
今世傳代は伝説よ延喜の清事 松

とけはあ無おりの業此 けりく人古  
今相同し也 清代と異なる傳説也  
能く申は有難也今こそ不審まき乃  
日の せりるもやうるをわかん海の  
所しる伯の江 実ハも妙 松を  
色地心 妻まゝ 長栄に 阿海  
浪静くして國を治るは時風枝成

高野

形上さぬ代下をまきやあひ上は相生の  
松上を同制下かかるとれ上実上を下作上るを  
あ上も抑下る上もかか下る上ふ上とある上民上也  
て上き下たる上君上の上あ下ち上ある下ら上る下や君上乃  
恵上ハ下有上ら下る上や 夫人上茶上末上の上行上  
と上付下中上せ下少上も下花上実上の上時上を下き上ら下る上は  
陽上春上の上遠下成上候上へ下る上南上枝上花上始上て下開上き

物上色上とも下此上松上と下る上親上色上也上ら下る上形上あり  
て上花上葉上時上と下ら上る下ら上ん 日上の上と下此上色上  
あ上も下一上子上年上乃上色上君上此上中上ふ下始上ら下る上  
又上ハ下松上村上の上久上十上か下へ上り下る上也上は上い下く上妻上  
か上ら下ふ上便上と下松上く下え上る下 日上此上葉上種上乃上露上  
の上ふ下あ上る下後上成上み下く上種上と下行上て下げ上せ下る上  
い上ち下此上色上の上あ下ら上ふ下教上考上此上の上あ下ら上ふ下



少らや 下曲 然るふ長融りあふ葉を  
有情心持のそ發るの秋ふとふ事  
けし草末去砂風多あきまてる物と  
しむらうらりけりまこれ林の東風ふうこ  
き杖の虫さふ砂はさきこれわ奇濃  
あなうはや中あをば松を万木よきく  
まきく十八公の精ひふ株乃緑をわして

古今のち成えんを始はれは舞り然る  
かとの木なりやきく実園ふと本物ま  
万民是と貴殿と 高砂の尾先  
障の喜をとわると ありけきうもて  
雲わい押もせも松のえ乃葉を色は園  
ゆらみとくと立よふ陰の物よりかきと  
毛落葉の盡せぬは浦よりなかり松を

葉の茂れどもして色は松と木乃加  
けり氷き代のそと人けりくをを  
木の中あもあはる松乃末代の例  
あもお生のの彩も久しに 葉あ  
押ふ松枝をくくむ木の青影り  
そも名残名宗終へる 今は何れ  
けりひもききもさ所は江の津

小相せれ人ぬと現し来り 不里  
機やきくは名所の松乃奇物を歌りて  
葉木さるゆをもれも 嘆き代々  
古色木を 我大君の國をまことい  
まもも君の代の位者小先約く何き  
あくゆゆさんと夕浪の行ゆる雲乃  
小松より赤葉て追風小ははく沖の舟



かう<sup>上</sup>の<sup>上</sup>う<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>せ<sup>上</sup>し<sup>上</sup> 二月<sup>上</sup>の<sup>上</sup>書<sup>上</sup>夜<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>り<sup>上</sup>  
 有<sup>上</sup>那<sup>上</sup>の<sup>上</sup>彩<sup>上</sup>白<sup>上</sup>く<sup>上</sup> 月<sup>上</sup>夜<sup>上</sup>若<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>神<sup>上</sup>遊<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>  
 西<sup>上</sup>彩<sup>上</sup>と<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>び<sup>上</sup>の<sup>上</sup>く<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>よ<sup>上</sup> 実<sup>上</sup>松<sup>上</sup>の<sup>上</sup>  
 乃<sup>上</sup>舞<sup>上</sup>姫<sup>上</sup>の<sup>上</sup>夢<sup>上</sup>も<sup>上</sup>と<sup>上</sup>じ<sup>上</sup>な<sup>上</sup>り<sup>上</sup>は<sup>上</sup>志<sup>上</sup>に<sup>上</sup>  
 の<sup>上</sup>松<sup>上</sup>も<sup>上</sup>も<sup>上</sup>後<sup>上</sup>ろ<sup>上</sup>な<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>海<sup>上</sup>波<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>  
 是<sup>上</sup>や<sup>上</sup>ん<sup>上</sup> 神<sup>上</sup>也<sup>上</sup>若<sup>上</sup>の<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>志<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>  
 朝<sup>上</sup>の<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>ゆ<sup>上</sup>く<sup>上</sup>夢<sup>上</sup>く<sup>上</sup>の<sup>上</sup> ま<sup>上</sup>の<sup>上</sup>遠<sup>上</sup>城<sup>上</sup>

楽<sup>上</sup>の<sup>上</sup>春<sup>上</sup> 扱<sup>上</sup>万<sup>上</sup>采<sup>上</sup>乃<sup>上</sup> 小<sup>上</sup>忌<sup>上</sup>夜<sup>上</sup> 乃<sup>上</sup>志<sup>上</sup>  
 か<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>の<sup>上</sup>無<sup>上</sup>魔<sup>上</sup>と<sup>上</sup>拂<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>治<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>  
 ち<sup>上</sup>壽<sup>上</sup>福<sup>上</sup>と<sup>上</sup>い<sup>上</sup>き<sup>上</sup>た<sup>上</sup>子<sup>上</sup>林<sup>上</sup>樂<sup>上</sup>を<sup>上</sup>民<sup>上</sup>と<sup>上</sup>  
 な<sup>上</sup>そ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>嚴<sup>上</sup>樂<sup>上</sup>の<sup>上</sup>命<sup>上</sup>と<sup>上</sup>乃<sup>上</sup>相<sup>上</sup>生<sup>上</sup>の<sup>上</sup>  
 松<sup>上</sup>風<sup>上</sup>吹<sup>上</sup>く<sup>上</sup>の<sup>上</sup>夢<sup>上</sup>そ<sup>上</sup>を<sup>上</sup>け<sup>上</sup>じ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>く<sup>上</sup>  
 乃<sup>上</sup>夢<sup>上</sup>そ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>し<sup>上</sup>じ<sup>上</sup>

弓八幡

長上  
沙代毛采納男山沙代も采納し抑ふ  
やうな名高き神小系人 折尾八

後宇多院より仕立奉る長下船の板を  
二月初卯八幡乃沙神事始むる節曲  
の道なきを陸路乃参詣仕立の宣  
旨と奉り只今八幡より仕立

上  
の海波静まりと死ねまやしく八尋  
乃重色作りて実九重此乃とくし  
其氏も世よりして出る目新も南形八幡  
山とて考よかり八幡山ふも考ふを  
意し移ふ是ハくや八幡山よ考くいん

上  
雨小神流中流り流りてい  
神祭目と二月のふとてやの  
六

上  
乃新廟  
花のこやまの  
上  
重も流り風り  
上  
君の代とて世  
日やみ代よさるん石れ敷と形りて苔のむ  
上  
松の葉ももき盤山保かんを  
上  
長閑なるはまれ目新と昔くて君安全  
小民厚く國の戸さうを流りさるき本  
よりも君とちりれ神國よ分て抄云も

とせの世の月をるる乃石清水絶れ流  
きの末までをせむると教門大出のえん  
有るに例うね 神と君との道はよ  
歩と運ふは山乃 松高を枝をさし  
ゆる燈乃案くくろくね法代は久波の  
月の桂を男山真もさやあさ彩よあそ  
君義歳と祈るゆる神よ歩とんやあそ

神よ歩とんやあそ 神よ歩とんやあそ

の人く多き中ふは成る乃後の伝教よ入  
多持をるるとい極是ハちと思えたり也  
いほくを系治れ人共 是ら高社  
は年久しくは人の中君安全と祈りしよあ  
又是小持るるの案乃ちゆる乃の及た是れ  
らあ奏は事叶つと今日け系治と結えち

是と君は捧物と申す  
其報しく

先く目本及正目形に極く申と奏せしむ

私に思ひ寄るる者又南社の法神院の分

て湯を申す 今日南社に糸泊小葉申

と持申半乞ふそ則神魚たる也 其上

圓とし早極 神の清代より棄れ申す蓬

乃矢よそ代と治りい此形は清代の例なり

能く奏しあふま 其は是と在平乃

清代の志ありい形をきりて此形と申す

神前より洋見申さる 禱く申と取お

しては何れ法用の者人きそ びり唐古

周の代と治り一固乃始より 申案と包

于戈と治り例とあり 申と袋よい

叙と名小納ふたつ 太平は清代の志あり



おまき  
六上  
支と周乃代是ハ本物名もを枝  
桑の國とひあハ  
四上  
桑乃弓とらる蓮の  
八棧山く誓の海と誓とを表と私居と  
水種の間とを残り  
靡草木の憲と色も  
何と成法神説を同出度神説を同出度  
初りる  
上  
抄弓箭を以て代と作り始  
中いけし人望の古代初りても則苗社の法

神カ形り  
物ふ神切字底云韓と徒ハ  
終りる  
四上  
同く應神天皇は法聖運  
法在位も久しく國富民を興ふ治る天  
下今小絶せぬ例とらる  
下曲  
上言と此月  
何より下可民よあつとをきけひの丁  
ありせも然りとい中せとも素とあつ  
法直を法とあより欽的天皇は法

宇加よよき前の玉字依の郡蓮基ち乃  
葉よ八懐えと形も八重旗をとあ久  
まて洛陽の南をよまるとくりのぬ代  
とちんとして石清水瀧き霊社と現し  
あひりされハ神功皇后も異国遷居れし  
るよ九別王寺の夢ふあて七ヶ日乃  
法林の例も今ハ久世のてれ岩戸の林

あうひ群居くうふも林業のりききて  
あふふてとく成し林業と 遷を  
や林世の跡あよ 今も道もまほり去  
と遍しやひりるる乃む玉の本乃枝よ  
令の終と結ひ射てふ早根林のそひ七日  
七枝乃法林業まふふてを納文し地  
林も感意の海山治る法代よまゆの國と

有りあふるる八幡三所の神酒を同初  
かりをる。其や哲も新きぎくば二月  
の神祭かゝる神意をみるに  
きめ世者は智と松風の更け月は秋初  
らと奏して君を祈む。祈る所あり  
りさの久し死代を結下  
を世とゆるく今世年と成まふと

生ると教言良此神よハ我初るか此代  
を世とゆるく今世年と成まふと  
慶の法神流そ能ふをて書消振ふ失  
ふとゆるく  
悉く奏しよゆるとじしおやまを喜樂  
乃同えて異者業をゆるく其あくる  
奇物うねく  
あくるうね



所く高敷多類魁如松の風まてり皆  
神祇と影を美粧りて神龜尔現大  
美薩八儀の神徳そ成る神徳そ  
を祈り奉れ

春光

風も静よ梅の葉れくさるぬ枝と  
如くは 折是と雄略天皇よ侍り  
長也梅も濃州本原の郡よ不思後ら  
泉出来るは美字を我君の空よふる字を  
美字の物定よも思共今時列本原と郡と  
多し 治るも國富民も多しとく

字小なるあり園はるの杖津流石也  
はる鄙の境よ名とすし英徳の中は  
るく書光の流よ名ありく  
し英徳れあまの松陰は様もむらり緑式  
入の訓る光の坂 登るもあまあり  
か 古人眠るやえて美い六十れ花  
るく 一生栖ありそふくくんの芽店入

月、嘯とさ月の板指の霜よ流へ白流る  
るく積まも光と書ふ流川乃水やま  
と流ひん 奥山乃深苔の下れをあり  
やあしと汲りも流し流ま汲汲も流  
し 長生の家よまろく 光せぬ門を  
らるるふも年あり山を流れあての側  
と書陰の岩井乃水と書と光との









いさやあは結人いさく水と結ん  
らひの竹葉いさく彩や緑とさぬん  
そか籬の秋を木林葉の秋と汲るを  
晋の七賢りまけいひのうらぐ倫り教ひき  
け水と残るり汲やそめ法と素と君れぬ  
さきん 曲あようふらひを石まら  
つそ遅くともあふ先とりて秋りさく川

て月と汲ふもや別も月と汲ふよ 山路  
のたれあそく何きり人きり 彩  
祖り菊れあそく秋の葉乃書ひは仙徳と  
更しり七百歳とぬる事も葉れあを問  
あよ 実や葉とまきれあ其まきひの  
露の問 中せとぬるや天地のひ  
き花のあまき 花咲実なるまあり

静かなる

目上  
 其の如く...  
 文上  
 花の父母...  
 やなり...  
 ぬき...  
 思ふ...  
 我君...  
 静かなる

加...  
 日上  
 い...  
 禪...  
 ぬ...  
 思...  
 て...

天の下の照日の光に曇らへし水の水の菜花  
泉のよもあやわらうこのあはれか

是とも松を八回法のあるそせぬは代と  
我といふ山人神の宮所

楊柳艶音井 神といふ 松といひ  
只是水波の流る 気生津夜乃の  
夜の声 峯れあやわらうも属

と 拍子と揃へくも樂と奏し滝津

心とも海は徳天身現の軌向なり

松陰よふ世と交する縁か

山の井の水は井のあやりの井の水

湯とて浪無くまら 活る湯代乃

君を紅く 長いあ水くぬひとうる魚

うらく長能君と伴く法代とて幾久

さきさきやあせり君よひうきまぬら  
れ上流よりいりも濁る滝津の水は流る  
波の音をくも能清代もしやよき清代か  
まやあ歳乃道帰つる人あ歳のとら  
る帰つるあ歳

清家濯

山も田外の神まきく二見乃浦と  
そつらひ 杵毛の雄略天皇小はなる  
后也我は彼伴勢古神宮小是つら内  
外れえめくら跡よ内外清浄の信んれ  
ぬくい又是より二見の浦石乃鏡も一足  
せらむと好い 八十鈴川清き流も乃流

みよりく陰をも急の松風が流るあ  
る魚までも神の恵は正統とありなり  
空と眺まらる氣をうけく急い  
行よ二足の浦ふ急いでいざ成小田とふま  
みくくくとそてあまのえ湯作の氣を  
思ふそい里人ふびとわとお作  
あうおを草の権りて手おもしうた

あまのえ湯作の氣を  
思ふそい里人ふびとわとお作  
あうおを草の権りて手おもしうた  
あまのえ湯作の氣を  
思ふそい里人ふびとわとお作  
あうおを草の権りて手おもしうた  
あまのえ湯作の氣を  
思ふそい里人ふびとわとお作  
あうおを草の権りて手おもしうた

亦も亦も我大君のまゐるれはくは  
くも同神と名なるとなき世ふ  
身れ誰の恵の卵さうじまや八咫の  
まても波動して吹く世の枝とるさあ天  
地は神の威徳とありやく  
いふも  
我老人よるくま事のい  
作らゆるそそ  
も成小田とん

田水のまゐるるに河川おとまるせ入湯作  
り氣を思ひとる不憂とそ  
も神の清田とてい又け川の御堂瀬の  
とて田水のまゐるる神水とまゐる入  
り水はふそとと立神徳長久の恵と  
あかくお事とて作  
川は代られとてい  
さん作

七巻

三

人皇十一代憲仁天皇は皇女清名を  
大和姫の清子赤毛を清神鏡といひま  
まくとしり給ひふ苗玉をていあは二見  
乃浦よといひ川路よはかそよりの給ひふ  
古裳れとを堀きこりーとび川をすまき  
給ひふまゝく清裳濯川といや也 其  
とれた田化る給のまゝの神の清鏡をふ

成へまよやありとまゝなりふ 彼  
やういふ川よふ二十八万歩のりゆふと  
ち獲へまゝの者のい清道志又やさんと  
志ふ川志保と後てまゝするといふなり  
其時の田化る給の今の奥玉は神鏡也  
是の時より入るふ依て山といひ神路と  
よ川といひ神路川と名はまを 温久と





と讀むるんらりふ子振神海ら山の村  
と種と樹るる神の代る久敷うふやひふ  
天乃根の天乃中むらこゝあよ事  
も唯神徳ふあははやぶ那の神乃ちふ  
やふふありるれかまや かく神鳥儀  
さく法も流ひ かくまかの法事や我ホ  
巻ひの凡まどうて神徳まよれあとうる

あよきても根あまるとなり 夫人の天  
下の神あまらがるはふふあまともひ  
かといふ 日月は列と照とといふも分  
てい唯正の類ふやうはよ 志る二二  
所とうへの法んと志るじとありや  
あといふかといふ 徳ふむ人神  
地神乃るふ皇ると草束の中津

く...  
授き給ひふ其三種の神宝と云く  
鏡の強よるとは鏡と移しは法身と教ら  
給りて其鏡乃志とく小万程と移し  
志と一物と懸へと志んやうと清めと心  
志と云く流るるがれといきこいさるもの  
日月の思徳ふあつはつるたをとし

と云く尚文の法神徳とあつるわ  
神徳の神代乃昔より今人の世ふ  
神徳の心もかよ業仁天皇の法神  
志の思根ふ文舟て皇大神成り  
志もた身覚の和光と傳ふ  
守るひ乃れは佛も同く人の志せう  
美如乃月よみの神も各現志り

あつた神道乃く 聖なる代とて  
ある人の心も有るに 一河乃海を以て  
あふむるを愛小都人君と神との縁を  
るまはし物源也 昔と老人の誰か  
けさるあふむる かし清代とて  
きつる 天津宮の 郭公 一都  
なくを折るふ神の昔とていふては回数

と見よはる我眞玉乃神とては雲霞の  
あふむる神の源と打もるるは流も彼小  
入舟をり流志く彼小入舟をり 実今神の  
神の代乃く 誓ひのあふむるに神とて  
その流あまふ成るるは邪やく  
君の代はきつると思ふ神をわは雲す  
川乃を海にかきりい守る人しく 百王を護の

神のつとわ光あま孫ますへらたの教ま  
神世までも守りの神奥玉の神とい執事  
なるを 厚くまうたの内外たえ居おろし  
らて 月よみのえ居照まらる じつたよ  
き陰や鏡の宮所 ぞすむまもあさ  
くまや 御うれふと影もつと深夜も使  
乃彩かこゑとづく ぶ子振るりのゆららの能

神風や伴勢の演教むらまをそ 娘孫也  
すむあまき演もふく 清き諸乃  
玉の彩々 光も天照と 天の思戸  
れ若とうのとも 柳葉乃神乎 ぶ子  
乃神や清裳濯川の 波乃まらふそそ  
水れ青山そそ 取く松の神遊ひ鏡の  
宮居あまはまの汐時ふ神あそびく白

波のむらさきと白波のまゝのまじり二  
見の濱松の代を新ある神と君と  
久しき

繪馬

治め海に世にちれく伊勢の  
小糸の世 押是の大炊の清口の  
公能く我事也叔を我若伊勢を神  
と依し給ひ教くは清と搦あふま初  
成なり今伊勢を神とは上 風を  
かゝる松をわくむらさきと白波のまじり

乃葉丸志トけとト多トくしてト濃田トの長務トうら  
濃野志トの系ト常ト統ト養トをト一ト統トりト  
心ト孫ト丸トれトくト トあトのト妻トよトんトは  
乃葉丸ト孫トもト之ト下トにトあトるト也ト ト孫トも  
やトもトをトらトうトりト候ト トまトまトりトやトりトんト年ト  
乃葉ト トまトるト乃ト葉ト丸トのト野トよトもトもトらト半ト  
とト桃ト林トよトはトりト事ト皆ト智ト人トのト事ト也ト

也ト ト乃ト葉ト丸トのト死ト世トのトちトもトひト時トよトひトん  
てト乃ト葉ト丸トのト海トのトどトはトまトまトしトめトらトうト入トてト志ト  
乃ト葉ト丸トのト年トふトあトりトしトとトとトあトりトてトもトはト  
有トりトしト也ト トらトもトやトもトのト孫ト代トとト乃ト葉ト丸トのト久ト遠ト  
也ト ト乃ト葉ト丸トのト代トくトゆトりトてトぐト ト仁ト  
未ト代ト乃ト葉ト丸トのト孫トまトてトあトりトしトとトとトうトけトはト  
きト乃ト葉ト丸トのト代トのト孫トまトてトあトりトしトとトとトうトけトはト

あまはなごころむかは人<sup>上</sup>なるく

不里城や如秋<sup>レ</sup>りる<sup>レ</sup>秋<sup>レ</sup>事よさくいよ

人吉のきま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>その人<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>く

や<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>この<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>い

何<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>秋<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>哉

あ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>珠<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>よ

後<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>す

ふ<sup>レ</sup>けて<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ら

ひ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>毛<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>かり<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>よ

あ<sup>レ</sup>目<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>西<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>志

あ<sup>レ</sup>ろ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>秋<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>

い<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>秋<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>只<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し

後<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>

先<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>氏<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>志

今

三







手枕 思ふころのあはれそ 朝成ふ  
まはるるを竹をけむき我る 伊勢の  
二相支姉と人し立出る 信長へ  
さうひ波を川さげの勢もゆゑの内か  
うてまらえくまみしと我まよ  
せふよりく せふよりく せふよりく  
なつてらして月よきのめれぬ 乃て君

とてしる者 我は日か秋津岩の乃  
大とらるる地神み代乃 乃て天無を神  
おえ利物を人のとせ川のく 水と  
きこはる波のあり 乃て我らしむる君  
なふみららふかみらのをえあむきいほ  
日神乃てかみらあむる 乃て秋文の  
なふらるる 乃て神くさむる乃て

今

あてのあらしに林林あらしき終るを報也  
ひいこの岩戸ふごらこのりきく  
林とらうい免きんよて日月二のけ紙  
とくーなる書代取のふていひまてり  
あらし神もきとまひきて  
ゆるや林とのらよふてきよまきく  
あらしふうあらしのゆるまき

あらしあり  
えと岩戸とすいむうて  
いはまて岩戸をたらうおのり林に  
あらしの夜よこりいしき終るを報也  
あらしあり  
あらしあり  
あらしあり  
あらしあり  
あらしあり  
あらしあり

老...  
上...  
久...  
乃...  
之...  
長...  
子...  
喜...  
下...



下掛謠本者寶永之初上梓以來雖頒行  
於世其誤不少欲攷正之不得正本久而  
不測羅明和之災梓乃灰燼今也幸得專  
門之佳本悉加攷正再命剞劂庶幾廣之  
萬世云

安永五丙申歲

日本橋新右衛門町

東都書林

日本橋通壹町目

戸倉屋喜兵衛

須原屋茂兵衛

